



主催—岐阜市 共催—国際交流基金
 後援—岐阜県教育委員会
 岐阜県国際交流センター

国際友好姉妹都市親善月間協賛
 市民の劇場〈第122回〉

アジア映画祭'91

2月16日(土)	岐阜市 文化センター催し広場 〈中国映画〉	「菊豆」(チュイトウ) PM 4:00~5:35
		「芙蓉鎮」(ふようちん) PM 5:45~8:30
2月22日(金)	岐阜市 文化センター小劇場 〈タイ映画〉 〈ベトナム映画〉	「ナンプーは死んだ」 PM 5:30~7:35
		「水の季節」 PM 7:40~9:10
2月24日(日)	岐阜市 文化センター小劇場 〈韓国映画〉 〈マレーシア映画〉	「成功時代」 PM 1:30~3:20
		「サラワクの息子」 PM 3:30~5:30

〔入場料〕 通し券 2,000円 一日券 1,000円 ●全自由席 〈前売り日〉平成2年12月20日(木) 電話予約も受付けます。
 ●前売り・問合せ—岐阜市文化センター ☎0582)62-6200 岐阜市民会館 ☎0582)62-8111

中国映画 「菊豆」 (チュイトウ)

監督：張 芸謀

1920年代開放前の中国、農村の染物屋へ嫁いだ一人の女「菊豆(チュイトウ)」。彼女の愛は、はかなくも許されぬものだった。年老いた夫の折檻から逃れ、その甥・天青(ティエンチン)を愛してしまったチュイトウ。彼女を待ち受けていた運命は、余りにも壮烈である。巡り逢えた一瞬の幸せも、逃れえぬ運命は過酷にも悲劇を生みだしていく。

果たして二人の生んだ子は、どのような運命をたどるのであろうか。悲劇のなかで必死に自らの愛を貫こうとした一人の女は、自分の生に何を見るのだろうか。人間の愛憎感を掘りさげた、奥深い芸術作である。

主役のチュイトウを「紅いコリーヤン」で鮮烈なデビューを飾ったコン・リーが演じる。



中国映画 「芙蓉鎮」 (ふようちん)

監督：謝 晋

文化大革命をはさんだ16年間の中国。「芙蓉鎮」というのは湖南省南端の架空の町。中国全土に吹き荒れた政治の嵐は、こんな小さな町にも容赦なく押し寄せてくる。屋台で一生懸命に米豆腐を売って、ひとかどの店を構えるまでになった「胡玉音」夫婦の努力は、無惨にも踏みにじられてしまう。

店を没収され夫を失う悲運に泣きながら、絶望の日々を送る胡玉音。やがて四人組追放による「文革」の終焉は、またしても一人一人の運命を新しく転換させていく。

これは山間の小さな町に住むひとにぎりの人達をとおして描かれる中国現代史の縮図であろう。

タイ映画 「ナンバーは死んだ」 監督：ユッターナー・ムクダナーサニット

ナンバーが10歳の時に両親は離婚した。母親と暮すようになったナンバーは、母親が仕事で家を空けることが多いこともあって、悪い仲間とのつきあいが増え、麻薬におぼれてしまう。彼は決心して麻薬中毒者を治してくれる施設に入る。

こうしていったん中毒は治ったにもかかわらず、中毒者として周囲から疑わしい目で見られる彼は、その心理的圧迫から逃れるようにしてついに注射器に手をのばす。ある夜、発作を起こした彼は母親の嘆きのうちに死んでしまう。

タイはかつて微笑の国といわれたほど、おだやかな国柄であった。それが近代化が進むうちに伝統的精神の危機が生じた。この映画の麻薬汚染もそのひとつであり、それを仏教に代表される伝統的精神が必死に食い止めようとしているタイの現実に肉迫する。



ベトナム映画 「水の季節」

監督：ホン・セン

ベトナム戦争のまっ只中のある湿地帯。雨季を迎えようとするこの地でも政府軍と解放軍ゲリラとが対立しあっていた。しかしこのどかな村では、それも極めて曖昧なもの。政府軍監視部隊長フィと解放軍ゲリラのフォンがどちらか酒が強いかで飲み競べをきっかけに二人は敵対関係を越えて親しくなり、フォンは政府軍の基地に自由に入りにできるようになる。

ある夜、解放軍は政府軍のフィの基地の前を攻撃もなしに通過ぎてもらい軍の中央基地に攻め入る。中央はフィの隊が職務を忠実に果たしていないことに気づき、彼の基地にヘリコプターを差し向けた。フィたちの部隊はそれを物資の補給だと思い、いったんは喜びに湧くのだが……。

ベトナム戦争というものをベトナムの農民の側から見つめると、敵味方といってもお互い相手はベトナム人同士だったのである。

韓国映画 「成功時代」

監督：チャン・ソヌ

高度成長下の韓国ビジネス界で苦闘する企業戦士の栄華と挫折の物語。「成功した者だけが自由だ!」このことばを座右の銘に、パンチョクは大手化学調味料会社、有美社に入社する。彼は宣伝企業マンとしてライバル社を蹴落としていく。カフェ「成功時代」のマダム、ソビと愛人関係になり、産業スパイ、CFモデルとして彼女を利用し、有美社は売上を伸ばし、パンチョクは、部長から理事へと出世していく。上司の勧めもあって、もはや利用価値の無くなったソビと手を切ることにした。

しかし、それも東の風、ライバル社は革新的な新製品を開発していた。敗北者となった彼を待っていたのは悲劇的な結末であった。

企業社会の虚像と出世主義を辛辣に批判し、88年韓国の話題作として大ヒットした。



マレーシア映画 「サラワクの息子」

監督：ラヒム・ラザリ

1949年、イギリス植民地下のマレーシア、サラワク州。反英活動家のパウイは妻の出産をかたずかずに飲んで見守っていた。しかし当局に追われた彼は、妻と生まれてくる子の世話を弟のワスリに託し、独り姿を消す。ワスリは子供をアザムと名付ける。

1988年、サラワク州庁に勤務するアザムは地方官としてラカ地区への転勤を命じられる。ここは、同地区のボスとして君臨するパウイの反抗的姿勢から、何かと問題の多い所である。アザムは現地に向かう。そこでは予想通り人々の冷たい視線が待っていた。そして自分とパウイの真の関係が判ってくる。

サラワクとマレーはイギリスから独立してマレーシア連邦となったが、民族も文化も異なっており、独立の前後の複雑な政治的確執を題材にした作品である。